

日伊親善 ジョイント・コーラス

参考資料 目次

I. グレゴリオ聖歌とキリスト教	1 頁
II. カトリックの典礼	2 頁
III. イタリアを中心としたミニ西洋音楽史	3 頁
IV. アルカデルト	4 頁
V. バレストリーナ	5 頁
VI. バード	7 頁

- 今回の訪問先イタリアの都市は
- ・カトリックの本山ヴァチカンのあるローマと、13世紀の聖人フランチェスコの生れた聖地であるアッシジという、カトリックにとっての大事な都市と
 - ・イタリア・ルネッサンスの中心地であり、オペラ発祥の地であるフィレンツェ、ロッシーニの生地であるペーザロ、世界で最初にオペラ劇場を作ってオペラを大きく育てたヴェネツィアと音楽的に由緒のある都市です。
- 又、今回ラテン語で歌う曲は、グレゴリオ聖歌とルネッサンス時代の代表的な作曲家の宗教曲ですので、これらに関連した西洋音楽史とキリスト教音楽について一通りの知識をまとめてみました。
- ・グレゴリオ聖歌は、西洋音楽の基礎になっている素晴らしい音楽ですが、カトリックの典礼（ミサ等の儀式）の音楽でした。簡単にその歴史と、カトリックの典礼のご紹介をします。
 - ・アルカデルト・バレストリーナ・バードは、いずれも16世紀の後半に活躍したルネッサンス・ポリフォニーの、後期の代表的な作曲家です。16世紀後半というと、日本では丁度戦国時代で、信長・秀吉時代です。（1600年に関ヶ原の合戦があり、徳川時代へと移っていきます。）
- 今から4百年も前の曲ですが、ルネッサンス・ポリフォニーの流れるような旋律のからみあいと、整った和声的進行が見事に組み合わさった素晴らしい合唱曲です。グレゴリオ聖歌時代からどのようにルネッサンス時代に移っていったかと、3人の略歴をご簡単にまとめました。
- ・又、イタリアはオペラの国です。オペラの歴史もイタリア中心に簡単に付け加えました。
- ご参考になれば幸いです。

I. グレゴリオ聖歌とキリスト教

グレゴリオ聖歌は、西洋音楽の源ですが、カトリック教会の典礼に用いられる音楽として、長い歴史を持っていますので、キリスト教や今度行くローマと関連させながら、グレゴリオ聖歌の歴史をざっと辿ってみたいと思います。

○ キリスト教の誕生と発展

キリストは紀元 30年頃十字架にかけられ、死後3日後に予言通り復活して、十二使徒やパウロなど500人以上の信徒の前に現れたと聖書に書かれています。このキリストの教えを十二使徒やパウロたちがさまざまな迫害にもかかわらず、熱心に布教して、エルサレムから中近東・ギリシャ・ローマにまで急速に広まりました。紀元64年にローマで大火があった時、当時の皇帝ネロはその責任を無実のキリスト教信者に負わせて、残酷な迫害を行なったことが記録に残されています。当時の信者たちは夜地下の墓所「カタコンベ」に集まって礼拝を行ない、神をたたえる歌を歌ったそうで、そのカタコンベは今は観光名所になっています。ローマにはパウロが主に布教しましたが、ペテロも晩年ローマに来て殉教したと言われており、そのペテロの墓の上に建てられたのがカトリックの総本山である**聖ペトロ大聖堂(サン・ピエトロ大寺院)**です。ローマはローマ帝国の首都であり、ペテロ・パウロの殉教地ということで、キリスト教の中心として、ローマ司教が他の地区の司教の上に立つようになり、**ローマ法王**となりました。

ネロ皇帝以後もキリスト教に対する迫害は続きましたが、その間もキリスト教信者は増え続け、ついに313年コンスタンティヌス大帝がミラノ勅令でキリスト教を公認し、更に391年にはテオドシウス大帝がキリスト教を国教としました。ローマ帝国は間もなく崩壊しましたが、キリスト教はますます発展し、民族大移動で西欧を支配したゲルマン民族やノルマン民族も教化して、中世には全ヨーロッパを精神的に支配すると共に、政治的にも大きな力を持つようになりました。

○ グレゴリオ聖歌

529年に聖ベネディクトがローマ郊外に修道院を創設し、厳しい戒律を作って神への祈りと労働と勉学に専念し、強い信仰心と高い教養を持った聖職者の養成を行ないました。この修道院の出身者が、キリスト教の布教に大きな力を発揮し、又この修道院での神への祈りの儀式を教会にも広めました。

590年に法王になったグレゴリウス1世は(ベネディクト修道院出身)、教会として神への礼拝の儀式としての「**典礼制度**」を確立し、その際歌う「**聖歌**」を整理しました。それまではそれぞれの国・地方でいろいろな聖歌が歌われていたのを、カトリック教会として整理して統一したので「**グレゴリオ聖歌**」と呼ばれるようになりました。グレゴリウス1世は同時にその歌い手の学校(スコラ・カントラム)を作って、聖歌がどの国でも正しく歌われるようにしました。日本では、聖徳太子(592年摂政)の時代で今から約千四百年前です。

○ 教会音楽の歴史

グレゴリオ聖歌は単声ですが、8世紀頃からその上か下に違った旋律を歌う**多声音楽**が歌われ始めたという記録が残っています。

910年にフランスのブルゴーニュ地方のクリュニーにその地方の領主が新しい修道院を作り、「**ベネディクトへ帰れ!**」という方針によって多くの優秀な修道士を養成し、半世紀後には各国にクリュニー派の修道院が多く作られました。後にクリュニー派の法王も何人か出るなど教会だけでなく、政治的・社会的にも大きな力となりました。クリュニー修道院は、教会の権威を高めるため、典礼行事を華やかにすることにも力を入れたので、教会音楽の多声化や、単声のグレゴリオ聖歌の歌い方についても

Alleluia (ヘブライ語で 主をたたえよ)

Amen (ヘブライ語で そうでありたい)

Kyrie (ギリシャ語で 主よ)

等の短い詞句に長いメロディをつけたメリスマ唱法とか、更にその長いメロディの部分に新しく歌詞をつけて歌うトロースとかセクエンティアとかが作られ、教会音楽は音楽的に大変進んだものになったと言われていています

今のグレゴリオ聖歌は、16世紀にルターなどの宗教改革に対抗して、カトリック教会の内部改革が行なわれ、その一環の**教会音楽の見直し**として、聖歌の純化ということでトロースとかセクエンティアをの大半を廃止し**単声のグレゴリオ聖歌を教会の典礼の聖歌と決め、ミサ用と聖務日課用約3千曲を4線譜のネウマに整理して、1614年に出版したものが基本**になっています。

尚カトリック教会は約40年前に、各国でそれぞれ自国語の**典礼聖歌**を作り歌うことを決めたので、現在ではグレゴリオ聖歌は教会の**典礼聖歌**として歌われなくなりました。

Ⅱ. カトリックの典礼

カトリックの典礼はミサと聖務日課です。

ミサは祝祭日(聖誕祭・復活祭等)や主日(日曜日)或いは婚儀、葬儀等の際に行なわれるカトリックの重要な儀式です、キリストの事跡、特に十字架の上の死により自らを神に捧げ、(奉獻)人類に赦しをもたらした行為を、最後の晩餐の言葉並びにパンとブドウ酒というしるしによって記念する、信仰告白行為でもあり、また感謝と賛美を神に捧げる儀式です。

聖務日課はカトリックで公的な日課として定められている祈りのことです。修道院では厳しく実行されているそうですが、一般の教会では全部は行なわれていないとのこと。

◎ ミサ 聖祭 missa

団員の木下弘巳さんから、実際の教会でのミサの式次第を提供して頂いたので、右の欄にご紹介します。尚、式の際歌われる歌詞はどのミサでも同じもの(通常文)と、式によって異なるもの(固有文)とあります。

○通常文 *ordinarium* (Ordinary)

いわゆるミサ曲はこの5曲です。

キリエ	Kyrie	憐れみの賛歌
グロリア	Gloria	栄光の賛歌
クレド	Credo	信仰の賛歌
サンクトゥス	Sanctus	感謝の賛歌
アグヌス・デイ	Agnus Dei	平和の賛歌

○固有文 [特文] *proprium*, (Proper)

入祭誦	introitus,	Introit
集祷文	collecta,	Collects,
書簡	epistola,	Epistle
昇階誦	graduale,	Gradual
アレルヤ誦	alleluia	
(詠誦	tractis,	Tract)
(続誦	sequentia)
聖福音書朗読	ezangelium,	Gospel
奉獻誦	offertorium,	Offertory
序誦	prefatio,	Preface
聖体拝領誦	communio,	Communion
聖体拝領後の祈り	postcommunio	

イテ・ミッサ・エスト
Ite missa est
又は(ベネディカムス・ドミノ/Benedicamus Domino)
ミサという名前は「Ite missa est 終わりました、お帰りなさい」という言葉からとったそうです。

◎日本の典礼聖歌は、第2ヴァチカン公会議の決定に従って、日本語の歌詞に高田三郎氏他多くの作曲家が作曲し、ミサで歌う全ての典礼聖歌が出来上がって歌われています。

◎ミサ式次第 (ORDO MISSAE)

四旬節第5週 3月26日 (金・週・紫)

〈開祭〉

♪入祭の歌 (歌わない場合は次の入祭唱)

- ・入祭唱 (詩編31・10、16)
- ・入祭のあいさつ
- ・回心への招き
- ・回心の祈り
- ・憐れみの賛歌 (Kyrie)
- ・集会祈願

〈ことばの典礼〉

- ・旧約書の朗読 (エレミヤ20・10~13)
- ・答唱詩編 典礼聖歌64 00 (詩編 18・3, 33+37)
- ・詠唱 典礼聖歌263 0 (ヨハネ6・64b+69b)
- ・福音朗読 ヨハネ10・31~42 そのとき
- ・説教
- ・信仰宣言 (Credo)

〈感謝の典礼〉

♪奉納の歌

- ・奉納行列
- ・祈りへの招き
- ・奉納祈願
- ・叙唱前句
- ・叙唱 主の受難一 (四旬節第5週)
- ・感謝の賛歌 (Sanctus)
- ・奉獻文
- ・記念唱

〈交わりの儀〉

- ・主の祈り (Pater noster)
- ・教会に平和を願う祈り
- ・平和のあいさつ
- ・平和の賛歌 (Agnus Dei)
- ・拝領前の信仰告白

♪拝領の歌 (歌わない場合は次の拝領唱)

- ・拝領唱 (一ペトロ2・24)
- ・拝領祈願

〈閉祭〉

- ・派遣の祝福
- ・閉祭のあいさつ

♪閉祭の歌

◎聖務日課 *officium*

昔の聖務日課をご紹介します。1日中お祈りをしているように見えます。

- ・朝課 夜明け前 *matutinum*, Matins
- ・賛課 日の出時 *laudes*, Lauds
- ・第1時課 午前6時頃 *ad primum*, Prime
- ・第3時課 午前9時頃 *ad tertiam*, Terce
- ・第6時課 正午頃 *ad sextam*, Sext
- ・第9時課 午後3時頃 *ad nonam*, Nones
- ・晩課 日没どき *ad vesperam*, Vespers
- ・終課 通夜、晩課のつぐと *completorium*,

Ⅲ. イタリアを中心としたミニ西洋音楽史

◎ 中世の西洋音楽

単声音楽のグレゴリオ聖歌からスタートした西洋音楽は、7・8世紀頃から多声化の動きが出始めました。

10世紀頃にかかれた「音楽提要」という音楽理論書には、多声音楽について楽譜付きで記述されており、この頃には多声音楽が広く歌われていたことを表わしています。10世紀というと日本では平安時代、源氏物語・枕草子が書かれたのが大体紀元千年位です。

教会音楽は教会の権威が高まるにつれて、典礼で歌われる単純なグレゴリオ聖歌をいろいろと飾り、華やかなものにするようになったようです。グレゴリオ聖歌で紹介したメリスマ唱法、トロースやセクエンティアもそうですし、多声唱法もそうだったようです。

12世紀の後半、バリのノートルダム大聖堂で活躍していたレオニヌスは、1年間の主要な祝日のミサと聖務日課のために新しい曲集を作曲しましたが、その中にはグレゴリオ聖歌を定旋律とした2声の曲が多数おさめられています。

12世紀から13世紀にかけては、十字軍が7次にわたって行なわれ、教会の権威が高まった時代ですが、教会だけでなく世俗曲の分野でも音楽が盛んになりました。まず南フランスでトロヴェールという騎士階級を中心にした歌曲が盛んになり、ついで北フランスのトルバドル、更にドイツのミンネジガーと吟遊詩人・騎士歌曲の大きな花が咲きました。

14世紀になると十字軍も終り、教会の絶対的な権威が落ち（法王庁がローマからアヴィニオンに移されたり、2人の法皇がたって争ったり）領主の力も強まり、又富裕な市民階級も増えてきました。こうした社会を背景にイタリアにダンテ（1265~1321）、ペトラルカ（1304~75）、ボッカッチョ（1313~1400）或いは絵画のジョット（1266~1337）等ルネッサンスのさきがけとなる人々が出てきました。

音楽ではフランスのギョーム・ド・マシヨール（1300~77）が最大の作曲家です。マシヨールは、「ノートルダム・ミサ」という一人でミサ5曲（6曲）を通して作曲した最初の人として知られています。教会音楽の多声的な伝統と、トルバドルの叙情性を合せ受継ぎ充実した

多声音楽によって、新しいポリフォニーへの展開を図った多くの世俗曲を作っています。

◎ ルネッサンス時代のイタリア音楽

15世紀のイタリアは、ミラノ・ヴェネツィア・フィレンツェ・ナポリ等の国が互いに競いながら、街を飾り、芸術家・文芸家を宮廷に集めた時代で、歴代の法王も厳しい宗教家よりも文化人や、メデイチ家出身者など文化・芸術に理解の深い人が多く、いわゆるイタリア・ルネッサンスの最盛期でした。

美術の面では、レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452~1519）、ミケランジェロ（1474~1564）が特に有名です。音楽も盛んでしたが中心になったのはイタリア人ではなく、フランドル出身の人達です。フランドルというのは今のベルギーを中心として、オランダや北・東フランスの一部を合せた地区にできていたブルゴーニュ公国とその近辺のことです。このブルゴーニュ公国は当時はフランスと並ぶ大国でフィリップ・ル・ボン（善良公）と呼ばれる良い君主に恵まれ、文芸・音楽が盛んになりました。音楽については各都市の大聖堂聖歌隊が付属の歌手養成所を持ち、多くの優れた音楽家を育てました。ここで生れ育った音楽家或いは音楽家の卵達は、欧州の各地の宮廷に呼ばれて活躍しました。特にイタリアの各宮



15世紀のブルゴーニュ公国領

廷は競って若い音楽家をスカウトし、またフランドルの人たちも気候が良く、待遇も良いイタリアは憧れの土地だったようです。こうして多くのフランドル出身の音楽家がイタリアに集まり活躍しました。

イタリアで活躍した主なフランドル出身の音楽家を挙げてみますと、

- フィレンツェ(メディチ家) ギョーム・デュファイ (1400~1474)
ハインリヒ・イザーク (1450~1517)
ヤコブ・アルカデルト (1505~1568)
- ヴェネツィア(共和制) アドリアン・ヴィラールト(1490~1562)
ヤコブ・アルカデルト
- ミラノ(スフォルツァ家) ジョスカン・デプレ (1440~1521)
- フェラーラ(エステ家) ジョスカン・デプレ
アドリアン・ヴィラールト
- ローマ(法王庁) ジョスカン・デプレ
ヤコブ・アルカデルト
ローランド・ラッス (1532~1594)

15世紀はイタリアの諸都市の中でも、特にフィレンツェがメディチ家を中心として栄え、イタリア・ルネッサンスの中心地でした。街の中心にある「花の聖母大聖堂」が完成したのは1436年ですが、この献堂式の音楽を任せられたのはデュファイでした。

デュファイは北フランスのカンブレの近くに生れ、青年時代にイタリアで活躍した後、郷里に帰りましたが、前の時代の諸々の音楽手法を全て総合すると同時に、新しい手法を加え、ルネッサンス音楽の開拓者として、多くのミサ曲・モテット・シャンソンを作曲しました。(デュファイはフィレンツェへ行く前に、ペーザロの大聖堂にもいました。)

当時のローマ法王庁のシステイナ礼拝堂聖

歌隊のメンバーの殆どはフランドルまたは北フランス出身者だったそうですし、こうしたフランドル出身の音楽家を中心に、ルネッサンス音楽はイタリアで花を咲かせました。ルネッサンス美術に比べて、ルネッサンス音楽は見劣りがすると言われますが、音楽特に合唱の分野におけるルネッサンス・ポリフォニーの素晴らしさは歌えば歌うほど分かってくるようです。楽器が中心になった近代音楽とは違った分野での、人の声の音楽の最高のレベルの音楽と評価して良いのではないのでしょうか。

16世紀になると次第にイタリア人の音楽家も育って来ました。まず有名になったのは、パレストリーナです。→V. パレストリーナ

◎ オペラの誕生とバロック時代

イタリアはオペラの国と言われますが、近代オペラの発祥地は、フィレンツェです。文化人のサロン「カメラータ」で古代ギリシャ劇の復興を目指して生み出した作品がオペラの誕生とされています。1594年に作られた「ダフネ」は楽譜が無くなったので、ペーリが1600年に作曲した「エウリディーチェ」が最古のオペラということになっています。1600年という日本では、天下分け目の関ヶ原の合戦のあった年です。

☞ 5頁

IV. ヤコブ・アルカデルト

Jacob Arcadelt (1505頃~1568)

ヤコブ・アルカデルトは、16世紀半ばにイタリア・フランスで活躍したフランドル派を代表する作曲家の一人です。

若い頃にイタリアに出て、1530年頃からフィレンツェのメディチ家の宮廷音楽家となりました。1535年フィレンツェ公アレッシンドロが、神聖ローマ皇帝カール5世の娘と結婚したときの祝典音楽(4声、楽器伴奏付き)やミケランジェロが作詞をした歌詞に作曲した曲などが当時の作品として残っています。

その後ヴェネツィアに滞在後、1540年から1551年までローマの教皇庁聖歌隊歌手を務め、次いでフランスの王室礼拝堂で活躍し、最後はバリーでなくなりました。

ミサ曲やモテトウスなどの宗教曲も多数書きましたが、イタリア語によるマドリガーレ、フランス語によるシャンソン等、世俗作品の分野で本領を発揮しました。

アルカデルトの作品の中で最も有名なのはこの「アヴェ・マリア」ですが、この曲は本来は1554年頃に出版された3声のシャンソンだったものを、19世紀の作曲家が4声に編曲し、グレゴリオ聖歌のラテン語の歌詞を当てはめたものです。アルカデルトの原曲は、当時のポリフォニー様式で書かれていましたがホモフォニー的(和声的)な傾向も強い曲でした。編曲された曲はご覧のように和声的な曲になっていますが、旋律はほぼ元のままだそうです。

1607年にはモンテヴェルディの「オルフェオ」が作曲されました。これは今聞いても立派な曲で、現在でも時々演奏されています。

モンテヴェルディ(1567~1643)は、イタリアのクレモナに生まれ、マントヴァの宮廷の楽長を勤めた後、1613年にヴェネチアの聖マルコ大聖堂の楽長になりました。ヴェネチアは共和制の商業都市として中世から繁栄してきました。音楽の面でも16世紀後半から、2重合唱とか、独唱・合唱・オルガン・器楽合奏を動員した祝典音楽を作ったりと、ローマでは法王庁の方針で、パレストリーナのように落ち着いた感じの音楽になったのに対して、大変華やかな音楽が作られ演奏されていました。モンテヴェルディは、こうしたヴェネチア音楽を更に発展させ、多彩なバロック時代へ入ることとなります。

1637年にヴェネチアに始めて入場料をとる一般公開の劇場ができ1700年までに17の劇場でモンテヴェルディの作品を始め 約400曲のオペラが上演されたそうです、それまでの音楽は、宮廷や貴族の室内で演奏されていて、特定の人しか聞くことはできませんでした。こうした一般公開の劇場ができたことによって、オペラが大きく広まり又オペラを中心に音楽が多くの人に親しまれる存在となったのです。

ルネッサンス音楽は、声楽が中心であり、いわゆるポリフォニー的な「線の音楽」と言われていますが、バロック音楽は劇音楽と器楽音楽が中心になり、和声中心の音楽と言われます。そしてバロック音楽の誕生から発展までの中心舞台はイタリアでした。

☞ 6頁上段

V. ジョバンニ・ピエルイジ・ダ・パレストリーナ (1525~1594)

Giovanni Pierluigi da Palestrina

パレストリーナは、ローマ郊外のパレストリーナ町に生まれ、生涯の殆どをローマで過ごし、法王庁を始めローマ市内の教会などで楽長として活躍した、ルネッサンス時代の最後を飾るイタリア人の大作曲家です。

少年時代、ローマの有名なサンタ・マリア・マジョーレ教会のリベリアーナ礼拝堂付属少年聖歌隊隊員になり、1544年に故郷の町のサンタ・ガーピタ大聖堂楽長になりました。この町の司教は、後に法王ユリウス3世(ジュリオ3世 在位1550~1555)になった司教でした。そのひきたてもあり、パレストリーナは1551年若くして、ローマ法王庁のカペラ・ジュリアの楽長になりました。

当時ローマ法王庁には、専属の聖歌隊が二つありました。一つは今でも有名なシステイナ礼拝堂聖歌隊です。システイナ礼拝堂は、法王シスト4世(在位1471~1484)がサンピエトロ大聖堂を建直した時に、新しく造った礼拝堂(1481年)で、シスト4世に因んで名付けられました。その時に法王庁聖歌隊を礼拝堂に移して今に至っています。システイナ礼拝堂はまた、ミケランジェロ(1474~1564)の大作「最後の審判(壁画)」と「天地創造(天井画)」でも有名です。

当時のシステイナ礼拝堂聖歌隊は、フランドルやフランス出身の外国人(アルカデルトも1540~1551の間、聖歌隊の歌手でした)ばかりで、イタリア人の歌手は殆どいませんでした。そこでイタリア人の歌手を養成しようということで、1513年に法王ユリウス2世(ジュリオ2世 在位1503~1513)がもう一つ聖歌隊を作ったのがカペラ・ジュリアです。

パレストリーナは、1555年システイナ礼拝堂聖歌隊歌手にもなりましたが、これは法王ユリウス2世が亡くなると解任されました。

この頃は、マルティン・ルター(1483~1546)などのローマ教会に対する宗教改革の動きが高まった時で、ローマ教会の中にも内部で改革を進める動きが起りました。その代表がスペイン人イグナティウス・ロヨラ(1491~1556)が創立したイエズス会で、厳しい戒律と訓練を行い、法王庁の親衛隊的な存在となりました。(日本に始めてキリスト教を布教したフランシスコ・ザビエルはこのイエズス会の熱心な会員で、海外布教を行なったのです)イエズス会はローマでも新しく学校を作りました。パレストリーナは1551年に設立された「コレジウム・ロマーヌム」の音楽教師になり、グレゴリー聖歌等を教えたといわれています。

☞ 6頁下段

モンテヴェルディのオペラは、独唱・合唱・多くの楽器の合奏があり、この形によったオペラが多く作曲家によって作られました。又劇場が増えて入場料をとるためには、お客さんの好みに合ったオペラにすることが必要になり、オペラのメロディが美しくなり、歌い方もメロディと声を美しく聞かせるいわゆるベル・カント様式ができ、アリアが重視されるようになり、楽器も急速に進歩しました。

楽器の進歩にともなって、合奏曲を中心に器楽音楽が盛んになりました。(バロック音楽というと、まずヴィヴァルディの「四季」を思い出す人も多いと思います。)バロック時代に活躍した主なイタリア人を紹介しますと

- ・オペラ アレサンドロ・スカルラティ (1660~1725)
ジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージ (1710~36)
- ・器楽 シロラモ・フレスコバルディ (1583~1643)
アルカンジェロ・コレリ (1653~1713)
ジュゼッペ・トレルリ (1658~1709)
ジュゼッペ・タルティーニ (1692~1770)

アントニオ・ヴィヴァルディ (1678~1741)

ドメニコ・スカルラティ (1685~1757)

こうした人たちが活躍したバロック時代はイタリア音楽の全盛時代で、イタリア語が音楽用語として各国で使われることになりました。

バロック音楽は、次第にドイツ・フランス・イギリスへと広がり、それぞれで発展し、やがてバッハ・ヘンデルによって完成され、古典派・ロマン派へと展開していきます。

◎ イタリアオペラの展開

17世紀にイタリアで始まったオペラは、18世紀にはヴェネツィアからナポリへと中心は移りましたが、他のヨーロッパ諸国にも広まりました。

18世紀 グルック・モーツァルト

19世紀 ワーグナー

を始めとして多くの作曲家がオペラを作りましたが、19世紀のイタリアはミラノを中心としてオペラの黄金時代でした。

(V. パレストリーナ つづき)

スペインからローマに留学してきたトマス・ルイ・ビクトリアは、1552年に設立されたイエズス会のコレジウム・ジェルマニクムを卒業、その後コレジウム・ロマーヌム、コレジウム・ジェルマニクムの音楽教師を勤めたそうです。

パレストリーナは1555年秋、伝統のあるサン・ジョバンニ・イン・ラテラノ教会(前任者ラッスス)、1561年にはサンタ・マリア・マジョーレ教会とローマ市内の主要な教会の楽長を勤めました。更に1571年に先輩のジョバンニ・アムニッチャが亡くなった後、再びカペラ・ジュリアの楽長に就任、死ぬまでその任を全うしました。

こうした経歴が物語るように、パレストリーナは一生をローマの教会で過ごしたので、数多くの宗教作品を書きました。中でもミサ曲はパレストリーナの音楽を代表するジャンルであり、「教皇マルチェルスのみサ」を始めとして105曲のみサを作曲しています。又「Alma Redemptoris」のようなモテトウスも250曲以上作りました。また宗教曲ばかりでなく、世俗作品としても100曲以上のイタリア語のマドリガーレを作曲しています。

パレストリーナの音楽は、フランドル楽派

のポリフォニーの技法をもとにしていますが、美しい旋律と温かく柔らかい和声に支えられ、分かりやすい整った形の作品になっています。ローマ教会の保守的な傾向に対してポリフォニーの音楽を認めさせた功績を大きく評価する声がある一方で、教会の方針に沿った音楽になって、進歩が無かったという意見もあり、パレストリーナに対する評価は分かれています。

ルネッサンス時代、ポリフォニー音楽が技法的に高まると、歌詞が複雑に入り乱れてよく聞き取れない上に、世俗曲の旋律がミサに使われることもあり、キリスト教の大切な行事である教会のミサが音楽会のようなものという声が強くなり、教会改革の一環として教会音楽の改革が取上げられ教会の典礼で歌われる曲の大幅な制限が決められました。この会議の時には、ポリフォニー音楽を全面的に禁止しようという強硬意見もあったようですが、パレストリーナのみサ曲を聴いて比較的穏健な結論に達したと言われています。

尚この会議(トレント公会議 1545~1563)で、教会音楽の基本としてのグレゴリオ聖歌の位置づけが再確認され、その再整備が行なわれることになりました。→グレゴリオ聖歌

○ジョアッキーノ・ロッシーニ

Gioacchino Rossini (1792~1868)

ロッシーニは、今回2泊するペーザロで、トランペットとホルン奏者の父とソプラノ歌手の母との間に生まれました。音楽学校在学中から作曲を始め、17才の時にヴェネチアでオペラを上演したのを皮切りに、37才までの19年間に「セヴィリアの理髪師」など、39曲のオペラを書きました。1929年パリで「ウィリアム・テル」を上演し大成功を収めた後は、オペラを書くのをやめてしまいました。ロッシーニはオペラの他に器楽曲も多数作曲しています。

○19~20世紀にかけて、イタリアには多くのオペラ作曲家ができました。

ガエタノ・ドニゼッティ (1763~1845)

ヴィンチェンツォ・ベルリーニ (1801~1835)

らが19世紀前半に活躍しましたが、最も有名なのが、ヴェルディです。

その後、20世紀にも

ルッジェロ・レオンカヴァルド (1858~1919)

ジャコモ・プッチーニ (1858~1924)

ピエトロ・マスカーニ (1864~1945)

など素晴らしいオペラ作曲家がイタリアに生まれました。

○ジョゼッペ・ヴェルディ

Giuseppe Verdi (1813~1901)

イタリア・オペラの最高峰と言われるのがヴェルディです。北イタリアの田舎町に生まれたヴェルディは、ミラノのスカラ座を本拠として活躍しました。若くして愛児と愛妻を亡くしたどん底の中で、出世作「ナブッコ」が大成功を収め、一躍大作曲家入りしました。

彼は26才から80才までの間に、26曲のオペラを書きました。初期の作品は愛国的なテーマが多く、これが当時のイタリアの民族統一運動と結びついて、市民から強い共感をえました。その後、「マクベス」「椿姫」等文学的な戯曲に取組み、晩年には「オテロ」「ファルスタッフ」のように人間の内奥の葛藤を表現するなど大変に幅広い作品です。

ヴェルディは、イタリア統一運動に参加し1861年国家統一後の総選挙に出馬し当選しました。その後も創作活動を続けましたが1901年、87才で亡くなりました。ミラノで行なわれたその追悼式には多くの市民が参列し、「ナブッコ」の合唱「行け、思いよ、黄金の翼に乗って Va, pensiero, sull' ali dorate!」を歌って送ったそうです。ヴェルディが亡くなってから98年、再来年が没後100年となります。

VI. ウィリアム・バード

William Byrd (1543~1623)

ウィリアム・バードはルネッサンス時代のイギリスの最大の音楽家とされています。

父も宮廷音楽家だったのでバードもおそらく少年時代を王室礼拝堂の聖歌隊員になったと思われ、又当時オルガン奏者・作曲家として活躍していたタリス(1505頃~1585)の教えを受けたものと推察されています。

イギリスでは1543年に、国王ヘンリー八世(在位1509~1547)がイギリス教会を法王から独立させてイギリス国教会としましたが、バードは終生ローマ・カトリックの信仰を守り続けました。エリザベス女王時代(在位1558~1603)には王室礼拝堂の主要メンバーにもなっています。エリザベス女王は宗教について比較的穏健な考えを持っており、又バードの才能を高く評価したので、カトリック信者のバードを重用しましたが、バードは周囲との関係で大変苦勞をしたようです。

バードは鍵盤奏者としても優れた才能を示し、1563年にはリンカーン大聖堂のオルガン奏者となり、さらに1570年には王室礼拝堂の〈ジェントルマン〉と呼ばれる役職に就任しました。1575年にはタリスとともに、イギリスにおける楽譜出版と販売の独占権を与えられ、初期の音楽出版に多大の貢献を残したとされています。

バードは多くの宗教曲(ミサ曲、アンセム、モテットなど)を作曲していますが、ラテン語の曲と英語の曲とあり、ローマ・カトリック用とイギリス国教会用と使い分けていたように思われます。宗教曲以外にも多くの世俗曲や器楽曲も作りました。

「アヴェ・ヴェルヌ・コルプス」は1605年に出版された「グラドゥアーレ集I」に収録されている曲で、バードのモテットの中でも最も有名な曲です。歌詞は後年のモツァルトの同名の曲と同じで、14世紀の法王イノケンティウス4世の作と伝えられています。